



# 精神障害者から見た人々

広田和子 精神医療サバイバー&保健福祉コンシューマー

Vol.1

かつて私は主治医に「文章を書くのが好き」と語っていたところ、それが病状としてとらえられていた時代もあった。インフォームドコンセントのない医療ミスによる注射の副作用で廃人のようになり、鍵と鉄格子のある閉鎖病棟へ緊急入院した体験もある。現在も毎日口錠の向精神薬をのまないで眠れず、のんでも音がすれば眠れないので、横浜市精神障害者住み替え住宅制度を使って山の麓の一軒家に住んでいる。長年、日々の活動を通して出会った人々のことを書くのが夢だった。

神奈川県 警察官 小高藤安さん(42歳)

「小高さんは警察官らしくないですね」と新聞記者のA君は語り、「そうね」と私は答えた。A君と私とでは世代も立場も異なるので、いつか「警察官らしさ」について他の記者たちも交えて意見交換したいと思う。

小高さんは私からみて営業マンタイプ。それもそのはず。3月まで神奈川県警本部の広報県民課に在籍していた。私が県警の人々を実名で書きたいと思って取材申し込みをした時に「取材はお引き受けしますが、今後の広田さんの活動のためにきちんと広報課を通されたほうがいいですよ」と言った人がいた。

そして県警本部の親しい人の紹介で出会えたのが、週刊誌やテレビ等の報道に対応していた小高さんだった。当時、不祥事でたたかれた県警のイメージアップのため、小高さんは奮闘していた。暴走族の取り締まり、ひき逃げ事件捜査、少年非行の防止など、日頃知られていない

地道な仕事を一生懸命、県民に伝えていた。

小高さんに取材したい人の名簿と私が書いた警察関係の文章を送ったところ「ご本人の了解があればいいでしょう」となった。

その小高さんが警察署の生活安全課長として、5月に町内会・老人会・交番連合協議会の主催で「ワールドカップを前に地域の防犯」というタイトルで講演することを知り、広報課にも連絡して取材させてもらった。

「管内で、ひったくりが多発していますので、バッグは歩道側にしっかり持ち、自転車の前かごには目立つ色の網をかけて防ぎましょう。被害者の80%は女性と老人……」などとてもわかりやすく、にこやかに話していた。

聞いていた人々は中高年の女性が多かったが、講演とそれに引き続いて行われた交番のお巡りさんと小高さんの部下にあたる女性警察官による実演に、「あら！」とか「まあ！」と言いながら身を乗りだしていた。

「ワールドカップが近づくと警察はますます忙しくなりますので、みなさん！くれぐれも被害に遭わないよう気を引き締めて暮らしてください。犯人は、元気がない

ように見えた人を狙った」と語っています。……ところで、今日は〇〇で育った精神障害者で……の広田和子さんがみえています。広田さん！どうぞお立ちください」と小高さんは会場の人々に私まで紹介してくれた。私は「おはようございます。広田和子です。よろしくお願ひします」とあいさつすると、何人もの人が、帰り際に私に会釈して行った。

6月9日のワールドカップ日本対ロシア戦に引きつづき、6月30日決勝戦が行われた横浜国際競技場周辺に行ったが、多くのサポーターが行きかい、大勢の警察官が出動していた。

県警は県外からの応援部隊も含め7400人を投入して県内を警備し、県下53全警察署では外で警備にあたるた人をのぞき、署長以下ほとんどの管理職が出署していた。県警警察官の定員は1万4136人なので、その意気込みを肌で感じつつ、雑踏の中で小高さんの講演はタイムリーだったと思った。

